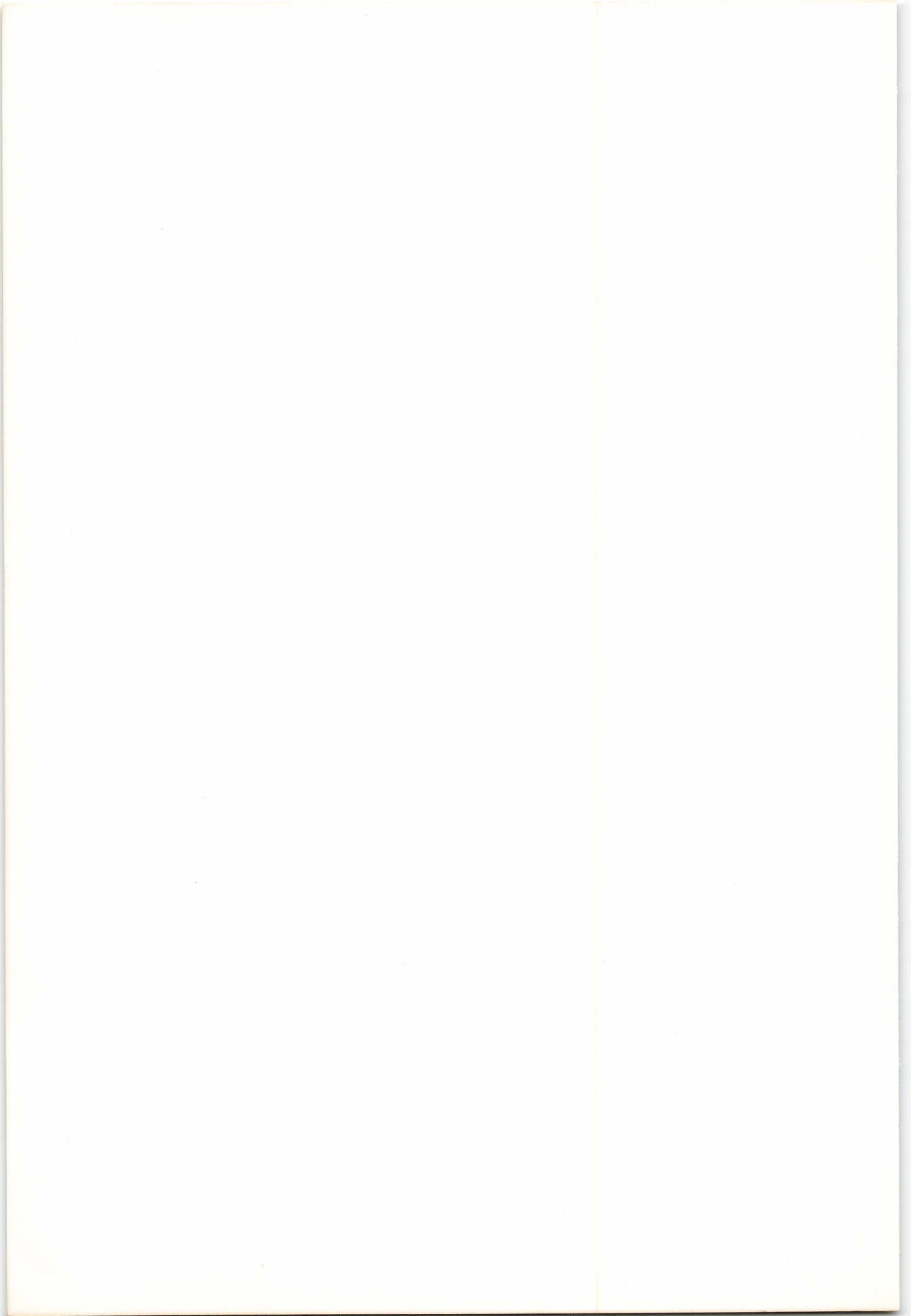


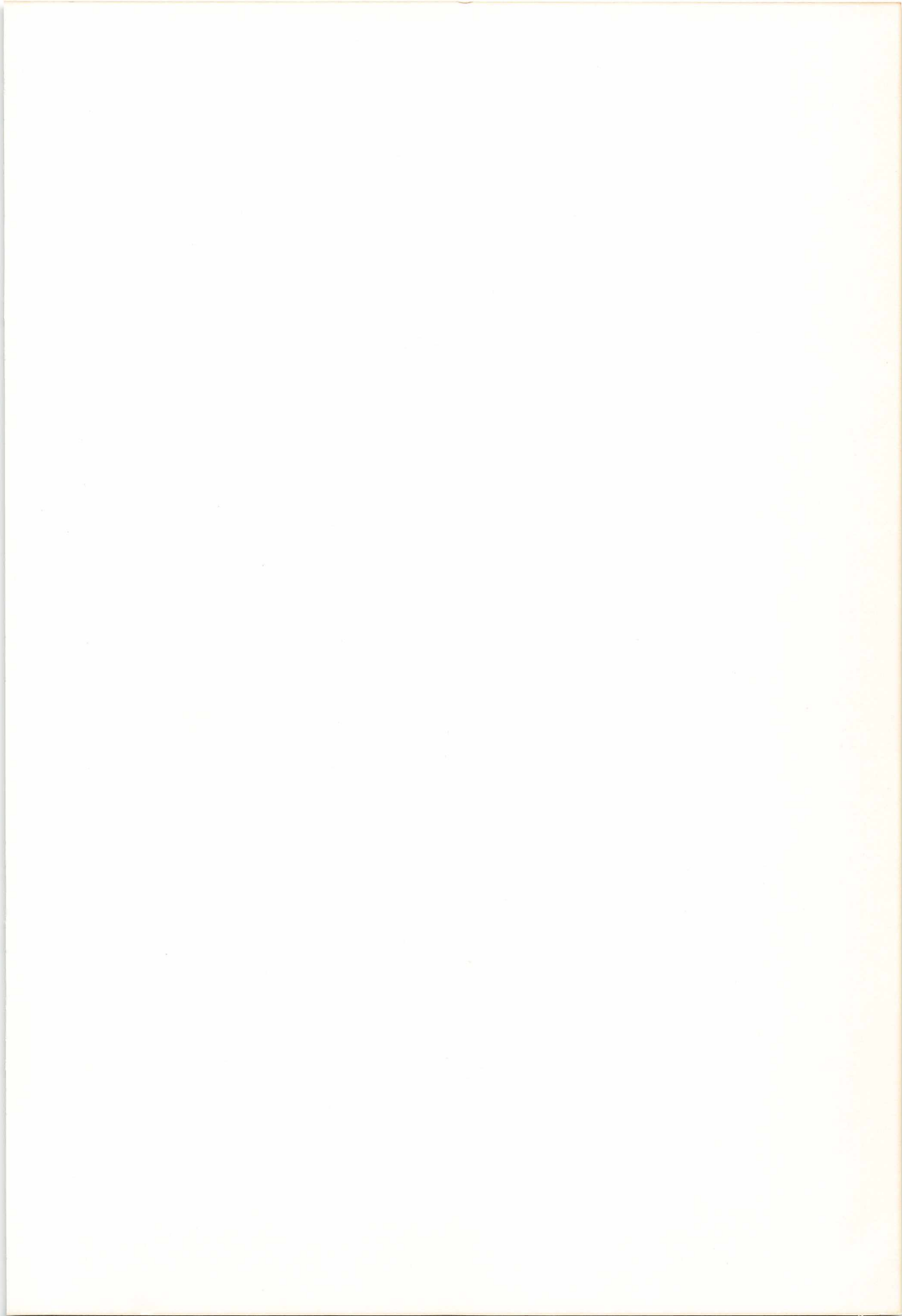
新千歳空港用地内埋蔵文化財 発掘調査報告書

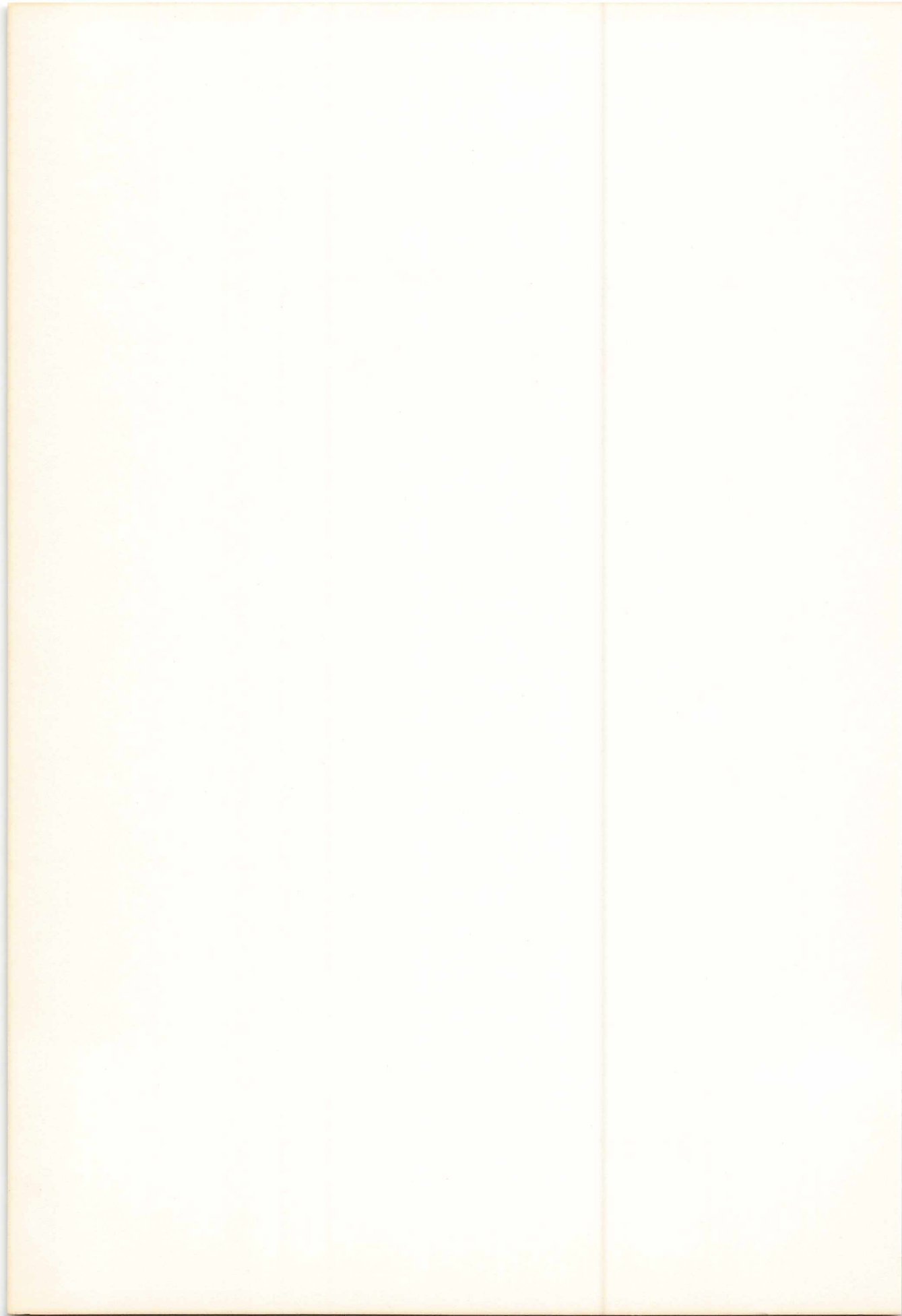
第1分冊 調査の概要

昭和61年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター





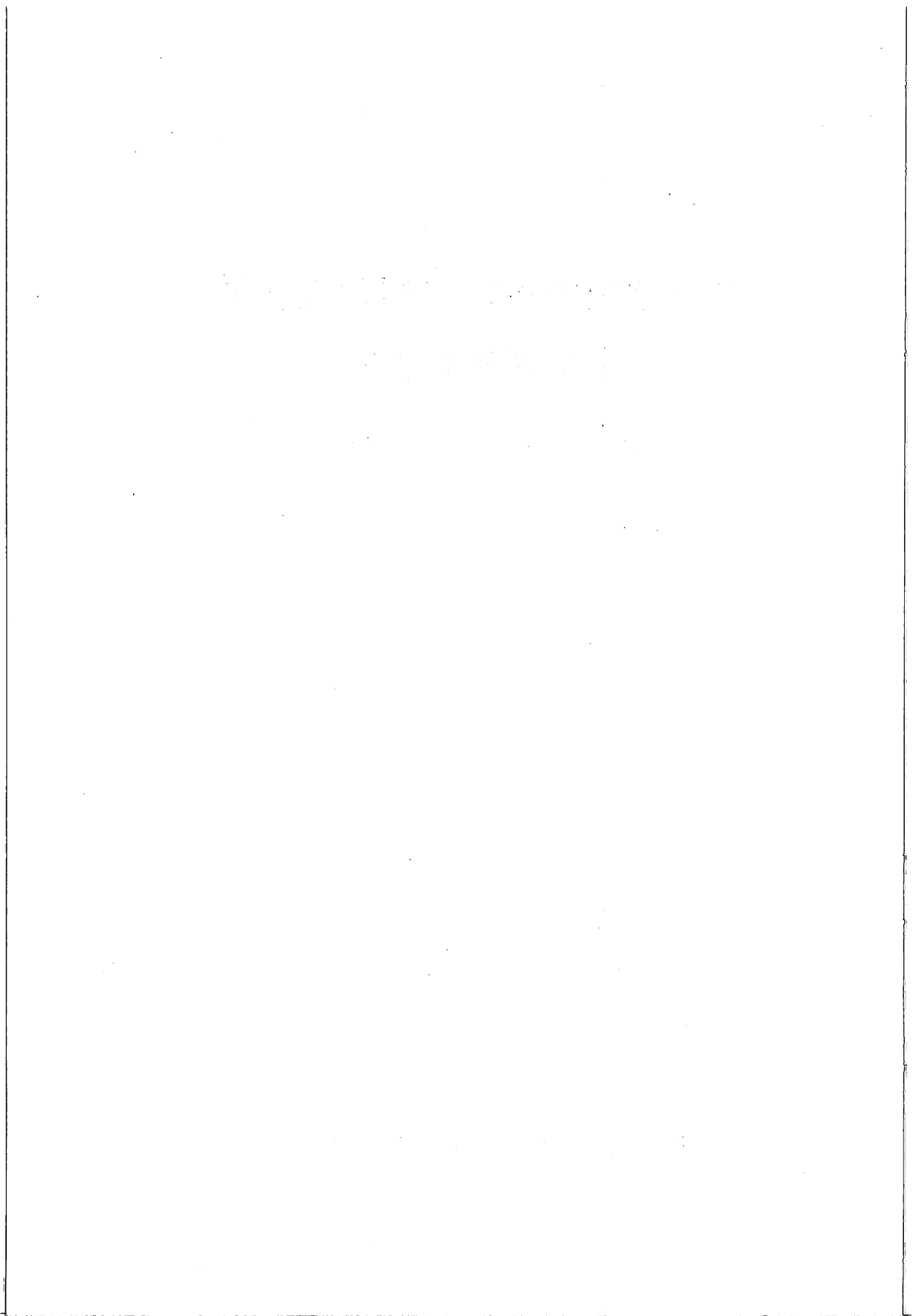


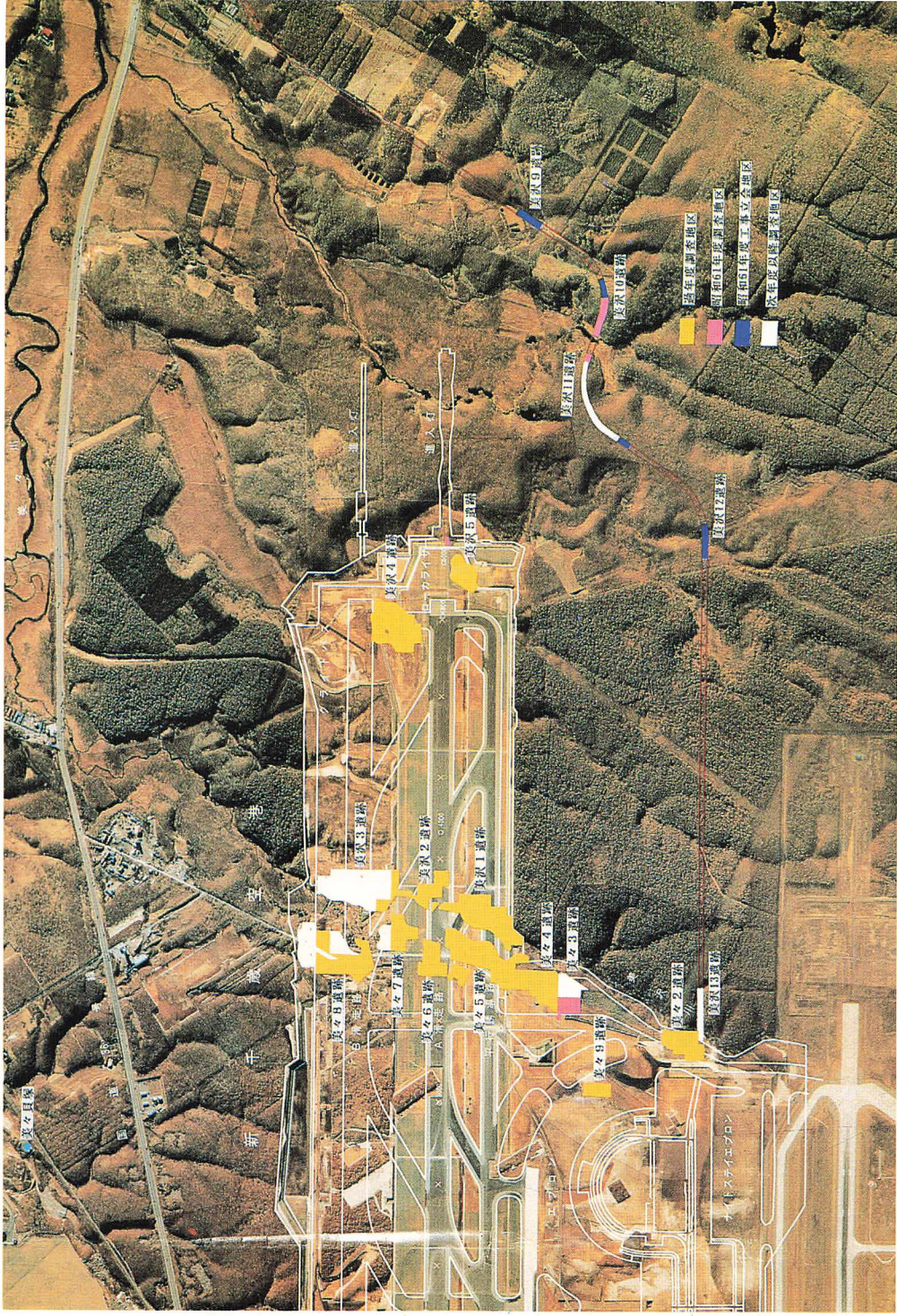
新千歳空港用地内埋蔵文化財 発掘調査報告書

第1分冊 調査の概要

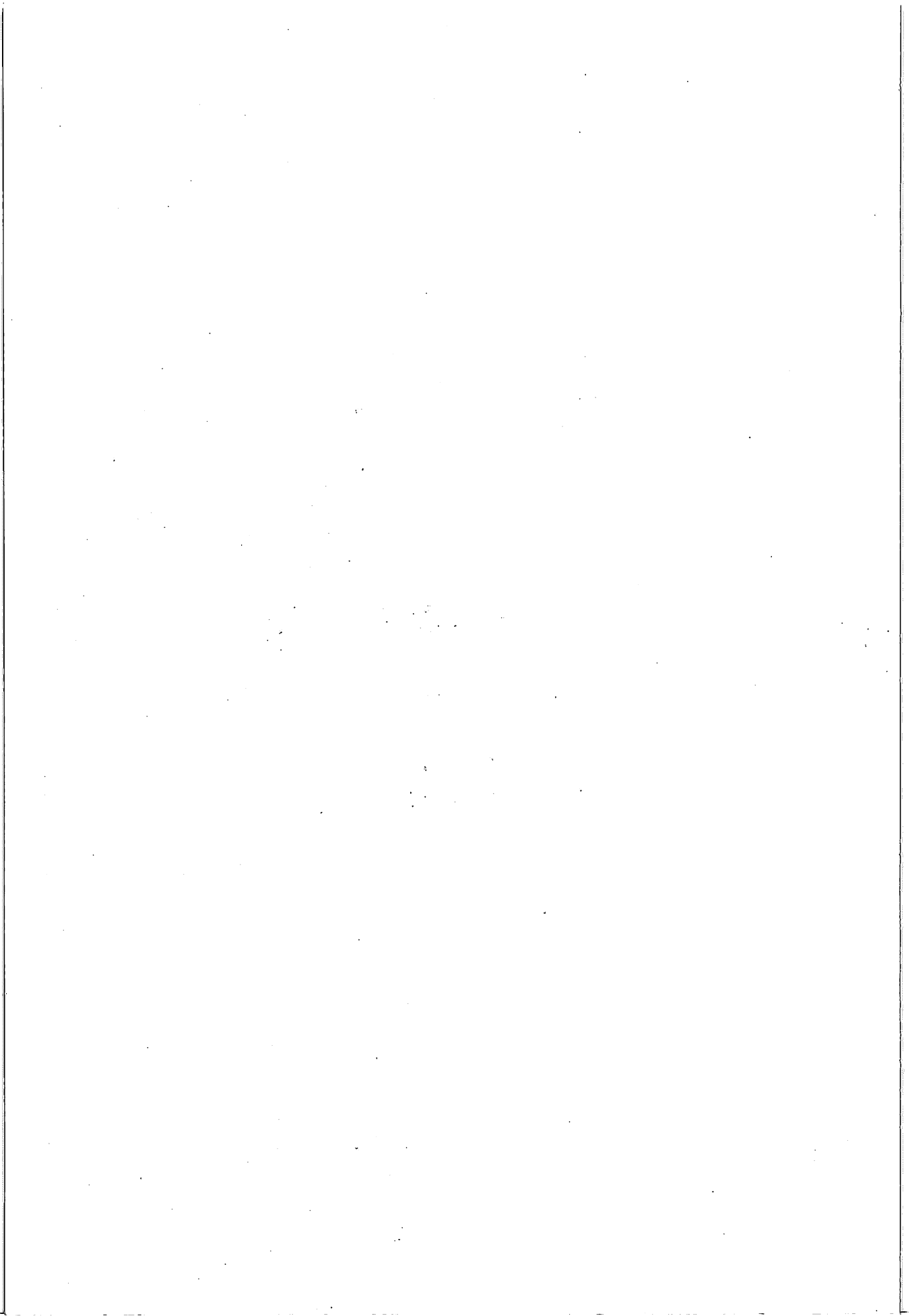
昭和61年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター





新千歳空港建設用地内の遺跡分布



例 言

1. 本書は、新千歳空港用地内の埋蔵文化財包蔵地発掘調査のうち、昭和61年度に調査を実施した美々3・美沢5・10・11遺跡についての報告である。
2. 調査は、財団法人北海道埋蔵文化財センターが実施し、本書は調査を担当した調査部調査第一班が作成した。執筆は以下のとおり分担し、このうちペンケナイ川流域の遺跡群Ⅰについてはそれぞれ末尾に文責者を記した。

調査の概要 野中一宏、美沢川流域の遺跡群Ⅰ 佐川俊一、フレベツ遺跡群Ⅱ 野中一宏、ペンケナイ川流域の遺跡群Ⅰ Ⅰ野中一宏、森 秀之、畑 宏明、大野 亨、Ⅱ佐川俊一、野中一宏、森 秀之。
3. 自然科学的な観察や分析等については、次の方がたに依頼し、結果の一部を本書に掲載した。美沢10遺跡火災住居跡出土木炭の液体シンチレーション炭素年代について、山田治氏（第4分冊Ⅰ-4）、美沢10遺跡出土の黒曜石石片の水和層年代について（第4分冊Ⅰ-5）、近堂祐弘氏。美沢10遺跡旧石器出土層及び関連層（第4分冊Ⅰ-6）、岡村 聰氏。
4. 写真撮影は、野外調査を伊野正之および各調査員が、室内整理作業での遺物等を伊野正之が担当した。遺構図等のトレースは篠崎淑子、大野 亨、土器の実測・トレースは新庄素子、三崎かおる、河口ひとみ、久末真紀子、石器等の実測・トレースは舟口直子、大場奈緒美、村岡由美子がおもに担当した。また、本文中のさし絵は西山史真子による。
5. 本書の図の縮尺、発掘区・地層・岩石等の記号については別記のとおりである。
6. 本書に記載する出土資料は、北海道教育委員会が保管する。
7. 調査にあたっては次の機関や人びとの指導ならびに協力をいただいた。

文化庁、奈良国立文化財研究所、北海道教育委員会、千歳市教育委員会、苫小牧市埋蔵文化財センター、運輸省東京航空局千歳空港事務所、株式会社山田組、北海道開拓記念館、北網圏北見文化センター、札幌医科大学第二解剖学教室、帯広畜産大学、北海道教育大学札幌分校、岩手県立博物館、滝沢村教育委員会、東北歴史資料館、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、青森県埋蔵文化財調査センター、仙台市教育委員会、大谷敏三、田村俊之、佐藤一夫、宮夫靖夫、工藤肇、渡辺俊一、大島直行、石田肇、百々幸雄、三野紀雄、春日井昭、岡村聰、門崎允昭、近堂祐弘、辻秀子、久保勝範、佐藤訓敏、大塚和義、沢田正昭、宮本長次郎、町田章、柳田純孝、富樫泰時、宮塚義人、河原純之、山崎信、鶴丸俊明、小池裕子、桐生正一、笠原信男、岡村道雄、菊地利和、中川重紀、三宅徹也、斉野裕彦、吉岡恭平、及川格、佐藤洋、北沢実、田部淳。

(順不同、敬称略)

記号等の説明

1. 遺構等の表記は以下に示す記号を用い、発掘順に番号を付した。なお、美沢11遺跡（第4分冊所集）のⅡ黒層の土壌はⅠ黒層との混乱を避けるために、途中の番号をとばし、101番からとした。

H：住居跡及び類似遺構
T：Tピット
F：焼土
P：土壌（墓を含む）
SP：柱穴様ピット
HP・SP：住居跡に伴う柱穴などのピット

2. 遺構などの図は、原則的には下記の縮尺で表し、方位を示す。例外については、その都度スケールを示す。

1/40：住居跡、土壌、Tピット、焼土、柱穴様ピット
1/4：土器実測図
1/2：Ⅰ～Ⅲ群の石器、土製品、石製品の实測図
1/3：土器拓影図、Ⅳ～Ⅵ・Ⅹ群の石器実測図

3. レベルは標高（単位m）で示す。

4. 遺物分布図では、原則として各種の遺物を下記の記号で表記する。例外については、その都度凡例を示す。

●：土器。 ▲：石器（Ⅰ～Ⅲ群・00・01a）。 △：剥片類（01・02）。
■：石器（Ⅳ～Ⅵ群）。 □：礫。 ◆：土、石製品。

5. 遺構の規模は、確認面での長軸長×短軸長/床（底）面での長軸長×短軸長/確認面からの最大深（単位m）の順で記し、平面形は床（底）面の形状で表わす。

6. 遺物の大きさは、土器については器高、口径、底径の順で記し、石器、土製品、石製品については、最大長、最大幅、最大厚の順で記す。

7. 遺構出土の遺物は、伴出遺物、混入遺物ともに合わせて各遺構の項の中に記載する。

8. 土層名は、下記の略号で記す。

Ta-a層、(a)：樽前a降下軽石層。 Ta-b層、(b)：樽前b降下軽石層。
Ⅰ黒層、(Ⅰ黒)：第Ⅰ黒色土層。 Ta-c₁層、(c₁)：樽前c₁降下軽石層。
Ta-c₂層、(c₂)：樽前c₂降下軽石層。 Ⅱ黒層、(Ⅱ黒)：第Ⅱ黒色土層。
Ta-d₁層、(d₁)：樽前d₁降下軽石層。 Ta-d₂層、(d₂)：樽前d₂降下軽石層。
Ⅲ黒層、(Ⅲ黒)：第Ⅲ黒色土層。
En-aローム層、(EnL)：恵層a降下軽石の風化したローム質粘土層。
En-a層、(EnP)：恵庭a降下軽石層。 Spfl層、(Sf)：支笏軽石流堆積物。

9. 土層の混在状態は、上記の略号を用いて下記のように表わす。

A+B：AとBはほぼ同量にまじる。 A>B：AにBが少量まじる。

10. 岩石名は下記の略号で記す。

Apl. : アプライト。 And. : 安山岩。 Aga. : メノウ。 Aga-Sh. : メノウ質頁岩。
Ba : 玄武岩。 Bl-Sch. : 黒色片岩。 Che. : 珪岩。 Gni. : 片麻岩。 Gr-Mud. : 緑色
泥岩。 Gr-Sch. : 緑色片岩。 Jad. : 硬玉。 Mud. : 泥岩。 Obs. : 黒曜石。 Per. :
カンラン岩。 Sa. : 砂岩。 Sch. : 片岩。 Ser. : 蛇紋岩。 Sh. : 頁岩。 Sl. : 粘板
岩。 Ta. : 滑石。 Tu. : 凝灰岩。 Hornf. : ホルンフェルス。 Rhy. : 流紋岩。

目 次

第1分冊 調査の概要

口絵	
例言	
記号等の説明	
目次	
I 調査の概要	1
1. 調査要項	1
2. 調査体制	1
3. 調査の経緯	3
4. 調査の概要	5
(1) 発掘区の設定	5
1) 美沢川・フレペツ遺跡群	5
2) ペンケナイ川遺跡群	5
(2) 層序	5
(3) 調査の概要	8
1) 美々3遺跡	8
2) 美沢5遺跡	11
3) 美沢10遺跡	12
4) 美沢11遺跡	14
II 遺跡群の立地と環境	15
III 調査の方法	18
1. 発掘と整理の方法	18
2. 遺物の分類	18
(1) 土器	19
(2) 石器等	21
引用参考文献	23

第2分冊 美沢川流域の遺跡群X

口絵	
目次	
挿図目次	
表目次	

図版目次

美々3遺跡の調査	1
1. 概要	1
2. 第Ⅱ黒色土層上面にみられた道跡と足跡	3
3. 遺構と遺物	7
4. まとめ	23
写真図版	31

第3分冊 フレベツ遺跡群Ⅱ

目次

挿図目次

表目次

図版目次

美沢5遺跡の調査	3
1. 概要	3
2. 遺構と遺物	4
引用参考文献	8
写真図版	11

第4分冊 ベンケナイ川流域の遺跡群Ⅰ

口絵

目次

挿図目次

表目次

図版目次

I 美沢10遺跡の調査	1
1. 概要	1
2. 第Ⅱ黒色土層の遺構と遺物	3
3. ローム質粘土層の遺物	79
4. 美沢10遺跡火災住居跡出土木炭の液体シンチレーション炭素年代	83
5. 美沢10遺跡ローム質粘土層出土の黒曜石石片の水和層年代について	83
6. 美沢10遺跡旧石器出土層及び関連層	85
7. まとめ	89
写真図版	107
II 美沢11遺跡の調査	143

1. 概要	143
2. 第Ⅰ黒色土層の遺構と遺物	145
3. 第Ⅱ黒色土層の遺構と遺物	154
4. まとめ	189
引用参考文献	190
写真図版	193

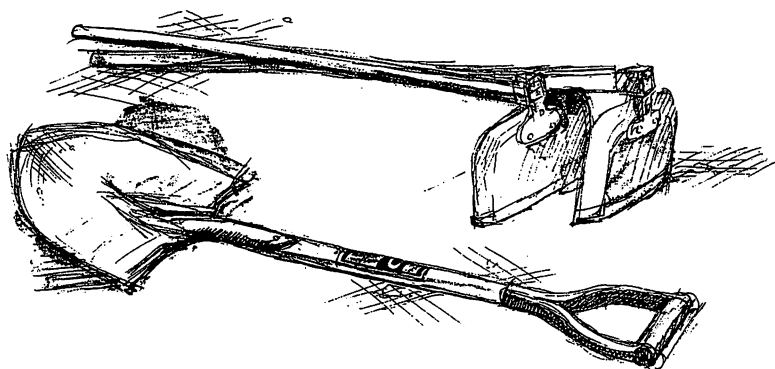
第1分冊 挿 図 目 次

図1 遺跡の位置	2
図2 美沢川・フレベツ遺跡群の基本区画および発掘区の呼称と調査地区	6
図3 ペンケナイ川遺跡群の基本区画および発掘区の呼称と調査地区	7
図4 標準土層模式図	7
図5 美沢川遺跡群の分布	9
図6 フレベツ遺跡群の分布	11
図7 ペンケナイ川遺跡群の分布	13
図8 遺跡群の立地と周辺の地形	16
図9 土器の分類	20
図10 石器等の分類(1)	21
図11 石器等の分類(2)	22

第1分冊 表 目 次

表1 新千歳空港用地内埋蔵文化財包蔵地の推移	3
------------------------------	---

第2分冊以降の節・項の目次および挿図・表・図版目次は、分冊毎に掲載している。



I 調査の概要

この調査は、北海道開発局札幌開発建設部が建設を進めている新千歳空港用地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の緊急調査で、本書には、昭和61年度（第11年次）の調査について収録した。

1. 調査概要

事業名 新千歳空港用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者 北海道開発局札幌開発建設部

受託者 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

調査遺跡・所在地・面積

道教委登載番号	遺跡名		面積	備考
A-03-98	美々3遺跡	北海道千歳市美々988-25ほか	4,565㎡	
J-02-82	美沢5遺跡	北海道苫小牧市美沢185-6	660㎡	
J-02-158	美沢10遺跡	北海道苫小牧市美沢310	4,027㎡	付替道路工事用地内
J-02-159	美沢11遺跡	北海道苫小牧市美沢185-3	1,570㎡	〃

調査期間 準備 昭和61年5月1日～5月5日

発掘 昭和61年5月6日～9月10日

整理 昭和61年11月1日～昭和62年3月26日

2. 調査体制

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

理事長 植村 敏

専務理事 山本 慎一 常務理事 藤本 英夫

業務部長 間宮 道男 調査部長 中村 福彦

調査第一班長 畑 宏明（発掘担当者）

文化財保護主事 長沼 孝 文化財保護主事 佐川 俊一

文化財保護主事 野中 一宏 嘱託 森 秀之

嘱託 森岡 治 嘱託 中田 裕香

写真技師 伊野 正之

北海道教育委員会社会教育部文化課

文化財保護主事 越田賢一郎 文化財保護主事 青柳 文吉

（昭和61年6月16日～8月23日）

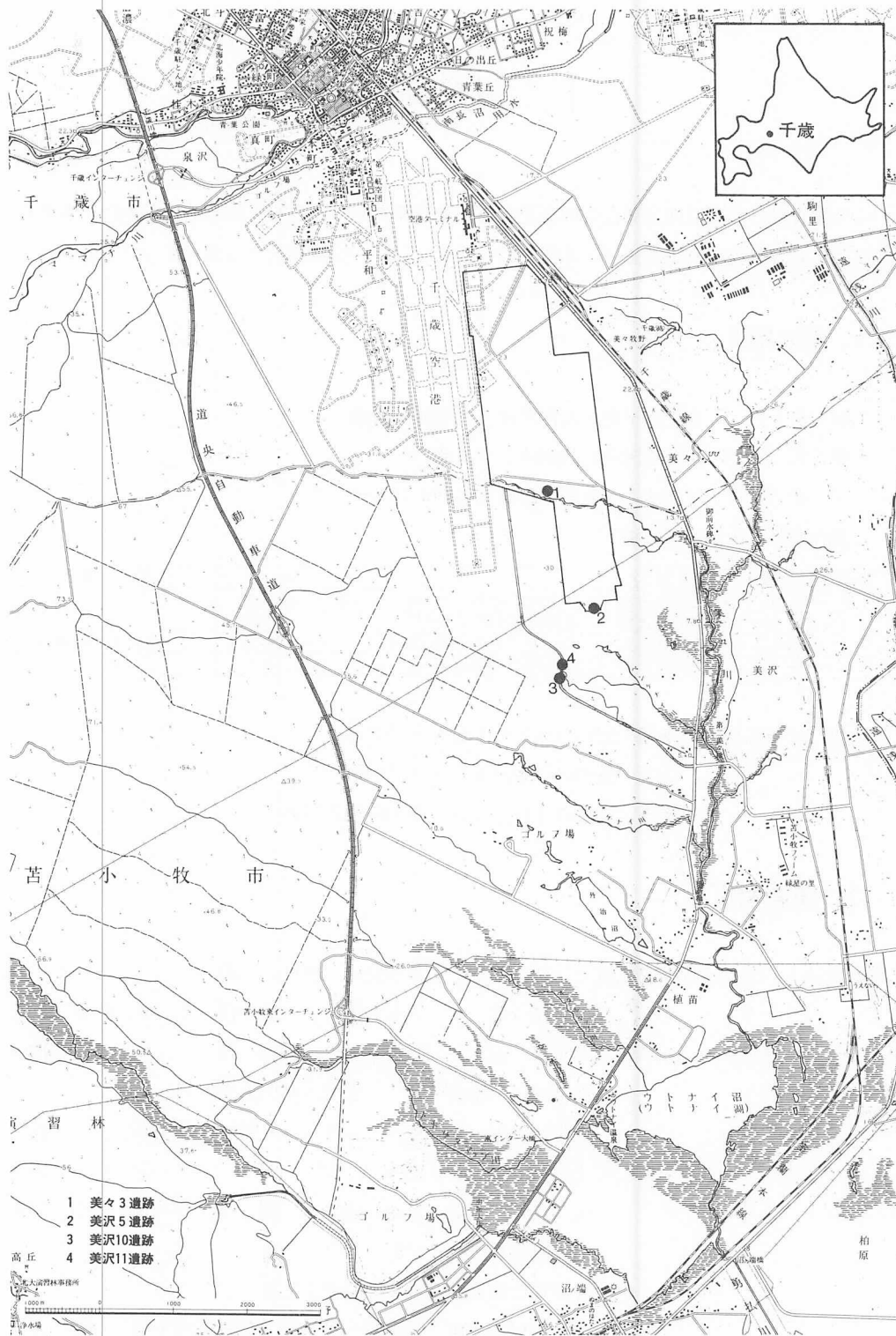


図1 遺跡の位置

3. 調査の経緯

新千歳空港用地内の埋蔵文化財包蔵地については、建設計画の具体化に伴い、開発地域のうち既存施設部分および未買収地部分を除く、約450haの分布調査が昭和49・50年度に行われている（「美沢川流域の遺跡群」 昭和50年度 千歳市教委）。また、昭和57・59年度にも北海道教育委員会（道教委）文化課によって美々8遺跡、美々4遺跡と美々3遺跡の間の分布調査が行なわれ（「美沢川流域の遺跡群」Ⅵ・Ⅷ 昭和57・59年度 道埋文）、さらに、昭和60・61年度には付替道路部分（延長5.2km）とA滑走路南側進入灯工事部分の分布調査が実施された。

発掘調査は、昭和51年度から始まり、本年度で11年次目となる。調査主体者は、当初、道教委であったが、昭和54年9月、財団法人北海道埋蔵文化財センター（道埋文）の設立に伴い、当センターに継承されて現在に至っている。

新空港建設用地内には分布調査の結果、約234,000㎡の埋蔵文化財包蔵地が所在しており、昭和60年度までに約71%に相当する167,000㎡が調査済みである（表1）。

付替道路は、空港用地内を縦横断している千歳市道美々泉沢線等、数ルートの道路（図8）の閉鎖に伴う代替道路で、図1に示すとおり、現空港と新空港の境界付近から南へ下り、途中東へ大きくカーブして苫小牧市植苗で国道36号線と交差するルートである。分布調査では、5ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されており、道教委と札建との協議の結果、このうちの3ヶ所（美沢10・11・13遺跡）について発掘調査を行うこととなった。延面積は16,510㎡で、このうちの1,693㎡は現状保存として調査の対象外となっている（表1）。

表1 新千歳空港用地内の埋蔵文化財包蔵地調査の推移*

所在地	道教委登録No	遺跡名	51年度	52年度	53年度	54年度	55年度	56年度	57年度	58年度	59年度	60年度	61年度	62年度以降	年層	計
美沢川遺跡群	千歳市 A-03-89	美々2遺跡									※※ 10,906	※※※ (5,000)				10,906
	〃 A-03-98	美々3遺跡											4,565	6,113		10,678
	〃 A-03-88	美々4遺跡	1,160		※※※※ (呑口)		7,150			6,475	6,180	5,899		3,400		30,264
	〃 A-03-97	美々5遺跡	300		6,628	752	8,450				6,544					22,674
	〃 A-03-96	美々6遺跡			5,000		3,450									8,450
	〃 A-03-95	美々7遺跡			5,000		2,400								3,210	10,610
	〃 A-03-94	美々8遺跡						11,900	3,875				1,828		17,957	35,560
	〃 A-03-87	美々9遺跡								5,000						5,000
	苫小牧市 J-02-70	美沢1遺跡	790	7,840	11,300		2,340									22,270
	〃 J-02-80	美沢2遺跡		10,560												10,560
〃 J-02-81	美沢3遺跡	1,750				3,480								31,020	36,250	
遺跡群	〃 J-02-73	美沢4遺跡				23,760										23,760
	〃 J-02-82	美沢5遺跡				6,800							660			7,460
遺跡群	〃 J-02-158	美沢10遺跡											4,027	1,593		5,620
	〃 J-02-159	美沢11遺跡											1,570	6,470		8,040
計			4,000	18,400	27,928	31,312	27,270	11,900	3,875	11,475	23,630	7,727	10,822	69,763		248,102

* 昭和61年3月4日現在（第9次調整）に加筆訂正。

※※ 第Ⅰ黒色上層以上を調査。Ⅱ黒層以下は調査未了。

※※※ 第Ⅱ黒色土層以下を調査。但し面積集計から除外。

※※※※ 調査面積約240㎡。但し面積集計から除外。

本年度の調査は当初、除雪車車庫建設予定地となっている美々3遺跡とA滑走路南側進入灯の建設にかかる美沢5遺跡について実施する予定であったが、付替道路部分の用地取得の進展に伴い、当初計画を変更し、美沢10・11遺跡の中で工事が最優先される部分、延5,597㎡について発掘調査することとなった。このため、調査体制自体も改編せざるを得なくなり、6月16日から8月23日までの間、道教委文化課から文化財保護主事1名の派遣を受け、調査員5名体制で調査に当たることになった。

美々3遺跡は新たに着手する遺跡で、過去6次にわたって調査された美々4遺跡の西側に連続する部分である。本年度の調査面積は当初、北半分の4,900㎡であったが、上述の調査工程の変更に伴い4,565㎡の調査で打ち切った。現地調査は昭和61年5月6日～6月21日まで行い、Ⅱ黒層のみを対象として実施した。Ⅲ黒層およびローム質粘土層の確認調査については、付替道路工事部分の面積増に伴い、本年度は保留し、次年度以降に実施することとした。

美沢5遺跡は昭和54年度に舌状台地の大半が調査され、Tピットを主とした遺構や縄文時代前期を主とした土器、石器等が検出されている。本年度の調査地区は昭和60年度の分布調査の結果、新たに加えられた部分で、前回の調査区の南東側に隣接しており、調査面積は660㎡である。現地調査はⅡ黒層のみを対象として昭和61年5月17日から5月26日まで実施した。

美沢10遺跡はペンケナイ川の右岸に立地しており、調査面積は前述のごとく、工事工程の都合から、5,620㎡のうちの工事が及ぶ範囲4,027㎡である。現地調査は昭和61年6月23日から9月10日まで行い、Ⅱ黒層を主たる対象として実施した。また、Ⅱ黒層調査終了後にⅢ黒層10%、ローム質粘土層4%について確認調査を行った。なお、調査区南側の工事施工内の70mと川沿いの湿地部分は道教委によって工事立会が実施されている。

美沢11遺跡は美沢10遺跡の対岸に立地しており、調査面積は美沢10遺跡同様に8,040㎡のうち、本年度分の工事が及ぶ範囲1,570㎡である。現地調査は昭和61年7月28日から9月6日まで行なった。調査は当初、Ⅱ黒層のみが対象であったが、Ta-C層除去後にⅠ黒層の遺構を確認したため、Ⅱ黒層の調査に先立ち、これらを調査した。また、Ⅲ黒層およびローム質粘土層の確認調査は、本年度の調査区が斜面部にあたるため、平坦部を調査する次年度以降に実施することとした。なお、川沿いの湿地部分については美沢10遺跡同様に工事立会が実施されている。

現地調査終了後、11月1日から4遺跡の遺物、諸記録を室内にて整理し、本書を作成して昭和62年3月26日に調査を終了した。

なお、従来新千歳空港における発掘報告書は、遺跡の分布する河川または湿原の名にちなんで表題がつけられており、本書でもこれらを踏襲したため、4分冊となった。

4. 調査の概要

(1) 発掘区の設定

1) 美沢川・フレベツ遺跡群

昭和49・50年度に行なった分布調査の際の50m四方の基本区画(図2)と、それを5m四方に100分割した小区画を単位として、従来発掘が進められてきており、本年度報告分の美々3・美沢5遺跡についてもそれに従っている。なお、南北軸は、座標北に対して西偏 $7^{\circ}22'38''$ である(図2)。

今回報告する美々3遺跡の調査区は、 $G_1 \cdot G_2 - 62 \cdot 63$ 区(図5)、美沢5遺跡の調査区は $B_2 - 96$ 区(図6)の基本区画内にある。

2) ペンケナイ川遺跡群

美沢10・11遺跡の調査では、空港用地と距離が離れているため、新しい区画を作ることとした。設定するにあたっての発掘区の区分は空港用地内と同様に、50m四方の基本区画とそれをさらに100区分した5m四方の小発掘区を単位としている。

発掘区の南北軸(Y軸)は、ペンケナイ川をはさんで両岸にある付替道路のSP2,300とSP2,400を結ぶ直線から起こした。

基本区画を設定するにあたっては両遺跡の全域を包括して、さらに本年度の調査地区をできるだけ少ない基本区画内に収めるようにし、南北軸(Y軸)を南からA~O、東西軸(X軸)を西から0~10と付した。従って基本区画の名称は、南西隅の交点で表示される。

小発掘区は、基本区画の南西隅を00とし、北へ01~09、東へ10~90と付し、名称は基本区画と合わせてE7-01、G7-00のように表示される。なお、Y軸は座標北に対し、東偏 $15^{\circ}00'19''$ である(図3)。

今回報告する美沢10遺跡の調査区はB7~E7・B8・C8区、美沢11遺跡の調査区はF7・G7区の基本区画内にある(図7)。

(2) 層序

本年度の調査遺跡は、その分布から大きく3地点に分かれているものの、基本的な層序に違いはない(図4)。しかし、火山灰の降下軸の違いや地点ごとの地形の差によって各遺跡ごとの層相には変化が認められる。おもな遺物包含層はI黒層とII黒層である。

以下、上層から順に各層について記す。

表土層 層厚約20cm。草木根を含む黒色土。

Ta-a層・Ta-b層 層厚60~80cm。樽前山起源の降下軽石層で、Ta-a層は1739(元

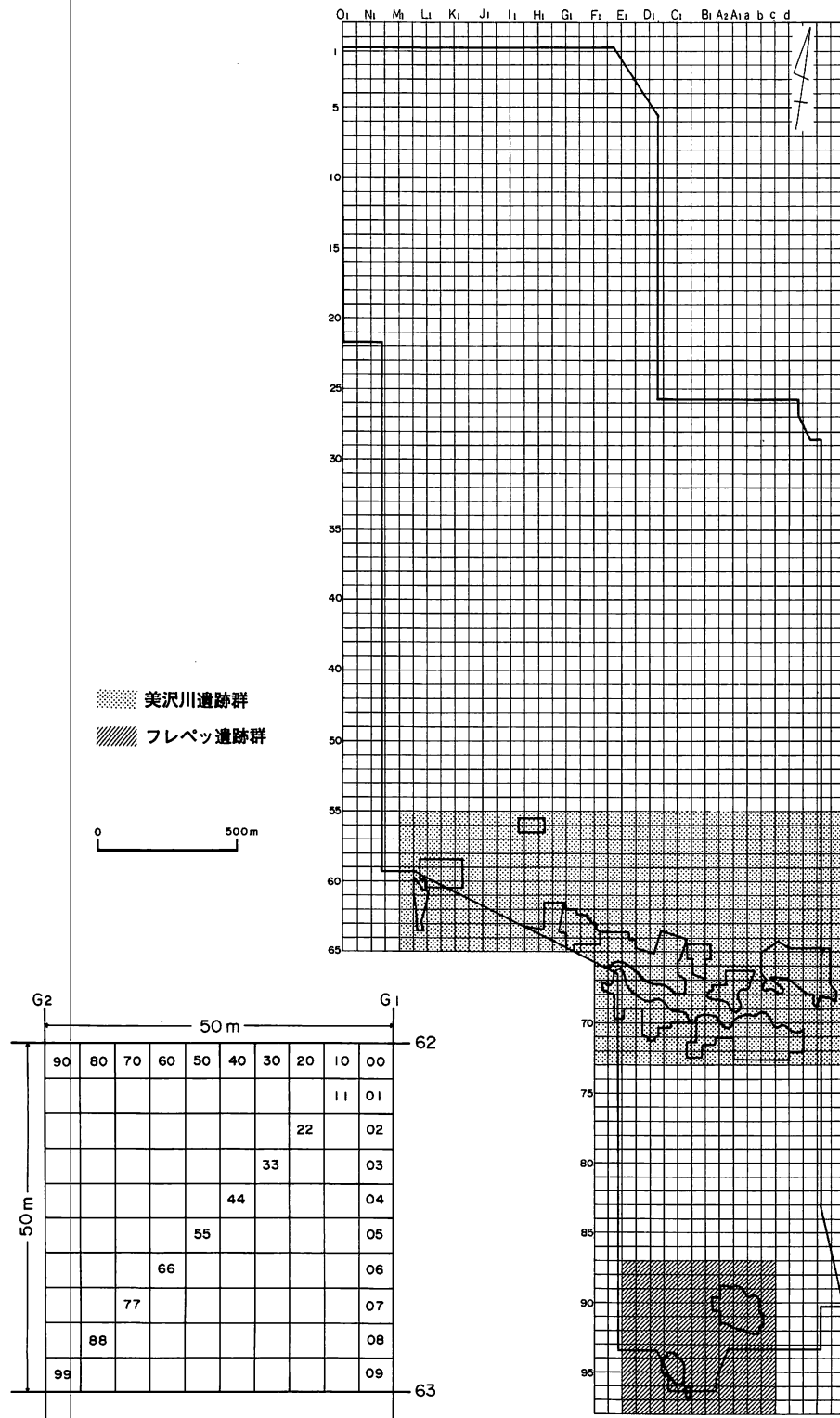


図2 美沢川・フレベツ遺跡群の基本区画および発掘区の呼称と調査地区

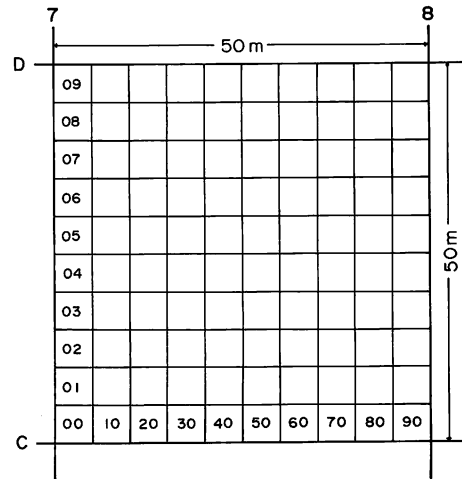
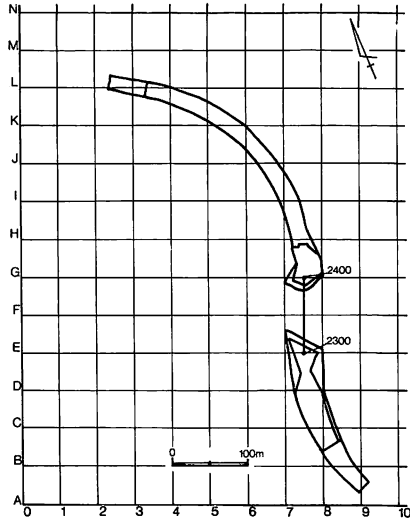


図3 ベンケナイ川遺跡群の基本区画および発掘区の呼称と調査地区

文4)年、そしてTa-b層は1667(寛文7)年の噴出物とみなされている。

地点ごとでは、平坦面で比較すると、Ta-a層は美沢川流域が厚く、フレツベ湿原からベンケナイ川流域に移動するに従い薄くなる傾向が認められる。一方、Ta-b層は全く逆の様相をみせており、美沢10・11遺跡では20cmほどの層厚である。

I 黒層 層厚10~20cmの黒色土。美々2遺跡では、本層上部に桃白色の細粒火山灰が堆積している。これは苦小牧火山灰(TM)に相当するものと考えられている。本層からは、縄文時代晩期、続縄文期、擦文期そして新しくは江戸時代の遺物が出土する。

Ta-c層 層厚40~60cm。本層は上部の軽石層(C₁)と下部のスコリア層(C₂)に2分され、上部のC₁層はさらに5~6層に細分される。本層の上下両層から縄文時代晩期末葉の土器が出土することから、本層の噴出年代は2300年前頃と推定される。

II 黒層 層厚30~40cm。美沢5遺跡の台地縁辺部では、本層の堆積は薄く5cm程度であった。この層からは、縄文時代早期中葉~晩期の遺物が出土する。

Ta-d層 本層は、上部の硬い岩片からな

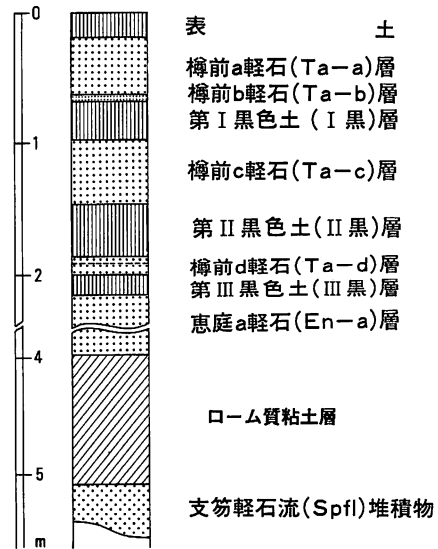


図4 標準土層模式図

るスコリア層 (d_1) と下部の軽石層 (d_2) とに2分され、美沢川流域では20~30cm、フレペッ湿原付近では50~60cm、ペンケナイ川流域では1mを超す厚さで堆積している。 d_1 層は美沢10遺跡で10~20cmの厚さで間断なく認められたが、美沢川流域では断片的にしかなく、多くはⅡ黒層下部に混在しているのみである。 d_2 層は上部の橙色に風化した軽石と下部の黄色のやや硬い軽石からなる層で、下部の軽石は美沢10・11遺跡でしかみられない。本層の噴出年代は、基底部出土の木炭によって8,980±160 y. B. P. (Gak-228)の年代値が示されていたが、苫小牧市有珠川2遺跡で本層下から縄文時代早期の貝殻文土器が出土したこと(「有珠川2・植苗3遺跡」昭和53年度 道教委)によって、8,000年前頃の噴出物とみさなされるに至っている。

Ⅲ黒層 層厚5~10cm。本層からは、美々4遺跡で黒曜石製の両面調整石器(「美沢川流域の遺跡群」Ⅵ 昭和55年度 道埋文)や黒曜石のチップ(「同」Ⅷ 昭和59年度 道埋文)が出土したことがあり、後者のチップの水和層年代測定では11,900±500 y. B. P.、12,300±700 y. B. P.の年代が示されている。

En-a層 層厚150~200cm。上部の風化ローム(En-L)と軽石(En-P)からなる層で、地点ごとの差は少ないが、ペンケナイ川流域では上部のロームが厚くなる傾向がみられる。

ローム質粘土層 層厚80~120cm。支笏軽石流起源の堆積物で大きく5層に分化でき、その間に2~3枚の細粒火山灰層がみられる。本層については、岡村 聰氏による分析の結果が報告されている(第4分冊Ⅰ-6)。本層からは、過去に美々5・美沢1遺跡(「美沢川流域の遺跡群」Ⅲ 昭和53年度 道教委)と美々4遺跡(「同」Ⅷ 昭和59年度 道埋文)で石器類が発見されており、今回の美沢10遺跡からも出土した。

ローム質粘土層の下位にはSpfl層、Spfa層が順に堆積している。

(3) 調査の概要

1) 美々3遺跡—第2分冊—

美々3遺跡は、美沢川左岸の台地上に立地し、過去6次にわたって調査されている美々4遺跡の西側に隣接している。本年度の調査は、前述の計画変更に伴い、遺跡の北半分4,565m²についてのみ行なった。調査の対象層はⅡ黒層である。

調査の結果、道跡および動物の足跡、土壌5個と共に土器、石器等14,691点が検出された。

道跡は、北西—南東方向、延長100mにわたって確認された。これは、美々4遺跡の昨年度調査地区から発見された道跡とつながるもので、総延長は145mにもなり、さらに本年度調査区外北西方向へと延びている。

動物の足跡は4列確認された。いずれも足跡の大きさ、並び方、間隔からキツネのものである可能性が高い。

土壌は、いずれも調査区北側から検出されており、近接して分布している。形状はいずれも

ほぼ円形を呈した小型のものである。遺物を伴うものはなく、時期、用途ともに不詳である。

検出された遺物のうち、土器では後期後葉から晩期初頭にかけてのものが最も多く、以下、晩期末葉、中期後葉のものが続く。このうち中期後葉のトコロ6類に相当するものは、調査区の南東部に集中する傾向がみられる。石器では、たたき石が最も多い。また、フレイク・チップの集中箇所が4か所発見されている。このほか、片石製の石斧および、これらを製作または再生する際に剥がされたと思われる剥片も比較的多量に検出されている。

2) 美沢5遺跡—第3分冊—

美沢5遺跡は、用地南端のフレベツ湿原に突出した舌状台地に立地している。本年度調査地区は、昭和54年度調査地区の南東側に近接しており、舌状台地の先端部にあたる。調査はⅡ黒層660m²を対象として実施した。

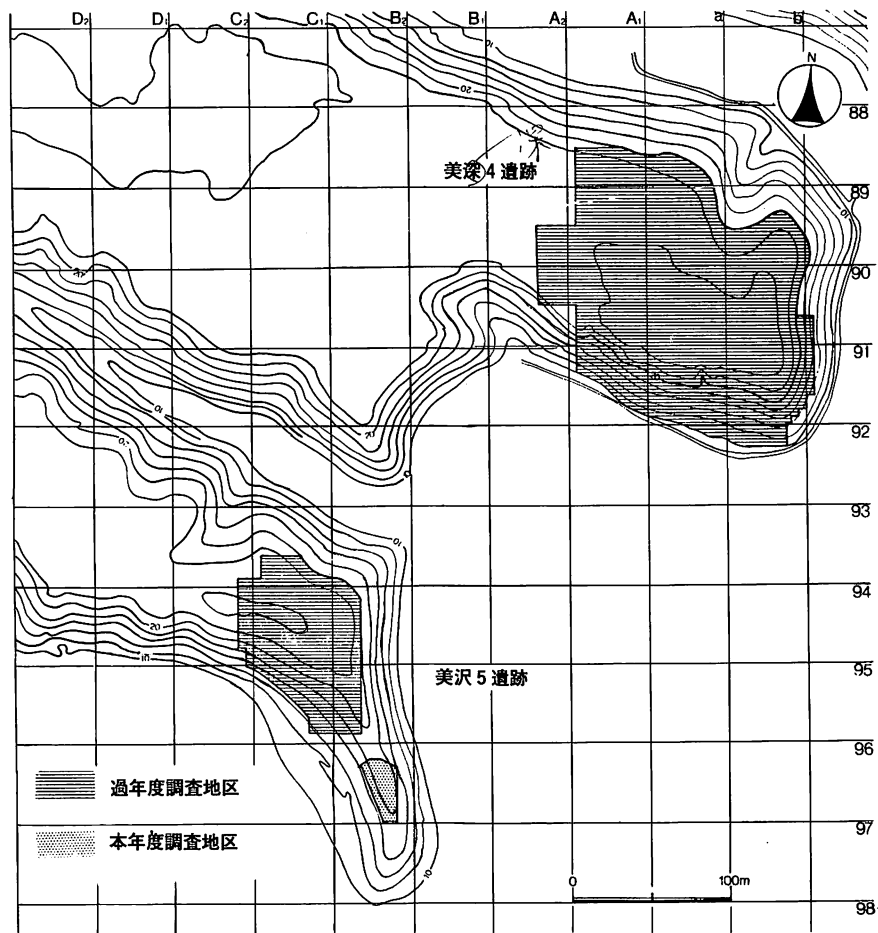


図6 フレベツ遺跡群の分布

調査の結果、Tピット1個と土器、石器等162点が検出された。Tピットは溝状の細長いもので、調査区中央部にある。土器はいずれも同一個体の破片で、後期初頭の沈線文を有する土器である。しかし、昭和54年度の調査では、同様の土器や余市式土器は全く出土していない。石器には、つまみ付ナイフと石斧片2点しかなく、このほかは剥片および礫片である。

3) 美沢10遺跡—第4分冊—

美沢10遺跡は、パンケナイ川上流部の右岸にあり、標高25mの台地上からそれに続く北向きの斜面に立地している。遺跡の範囲は美沢川遺跡群と同様に流域沿いに広がっていると考えられる。本年度の調査は、付替道路工事範囲4,027㎡について、Ⅱ黒層をおもな対象として行ない、下位のⅢ黒層、ローム質粘土層についても、それぞれ発掘面積の10%、4%相当について確認調査を実施した。

調査の結果、Ⅱ黒層からは住居跡5軒、土壙42個、Tピット5個と共に土器、石器等25,050点が検出された。またローム質粘土層からは、石核および剥片、礫片15点が出土した。

住居跡はいずれも台地上から検出され、中期後葉に位置付けられる。このうちH-1は長径が10mを越す大型の住居跡である。また、H-2・5とした中型の住居跡は火災にあったもので、大量の炭化材が検出された。この炭化材の¹⁴C年代測定を依頼した結果、H-2は4,110±60 y. B. P.、H-5は4,080±60 y. B. P.の値が得られている。また、これらの炭化材については樹種同定を依頼している。詳細な鑑定結果を待つて改めて報告したい。

土壙はすべて台地上に分布しており、径1m内外の円または楕円形を呈するものである。時期が判明したのは、27個あり、4個は縄文早期に、14個は前期に、9個は中期に位置付けられる。これら以外についても、覆土の堆積状態や土器の分布からみて、前期～中期に属する可能性が高い。縄文早期の石器製作に関わると考えられるものが1個あるほかは、どのような機能をもつものか不明で、墓と判断できたものもない。

Tピットは斜面下部に2個、台地縁に3個ある。形状はT-2とした低地にあるものが楕円形であるほかは、溝状の細長いタイプのものである。台地縁にある3個は、等高線に直交して作られ、列をなしている。このうちの2個からは底面から杭穴が検出されている。

検出された遺物のうち、土器では縄文早期～後期後半にかけてのものが出土した。縄文前期のⅡ群b類が最も多く、Ⅲ群b-2類、Ⅰ群b-4類がこれに次ぐ。これらはおもに台地平坦部に分布しており、時期毎に若干の分布域の相違が認められる。

石器等では剥片石器および石斧の量が極端に少なく、いわゆる北海道式石冠や石錘が多い。また、花崗岩および片麻岩の礫も非常に多く、大部分は火熱を受けて破碎している。

ローム質粘土層の調査では、台地縁から石核1点、剥片15点が出土した。本層表面下30～40cmほどのⅤ層中から検出されたもので、分布域から微量ながら2か所の炭化物を含む範囲が確認された。剥片の石材は黒曜石、めのう、珪岩で、このうち黒曜石石片2点について水和層代測定を依頼したところ16,100±1,000 y. B. P.、17,000±900 y. B. P.という結果が得られている。

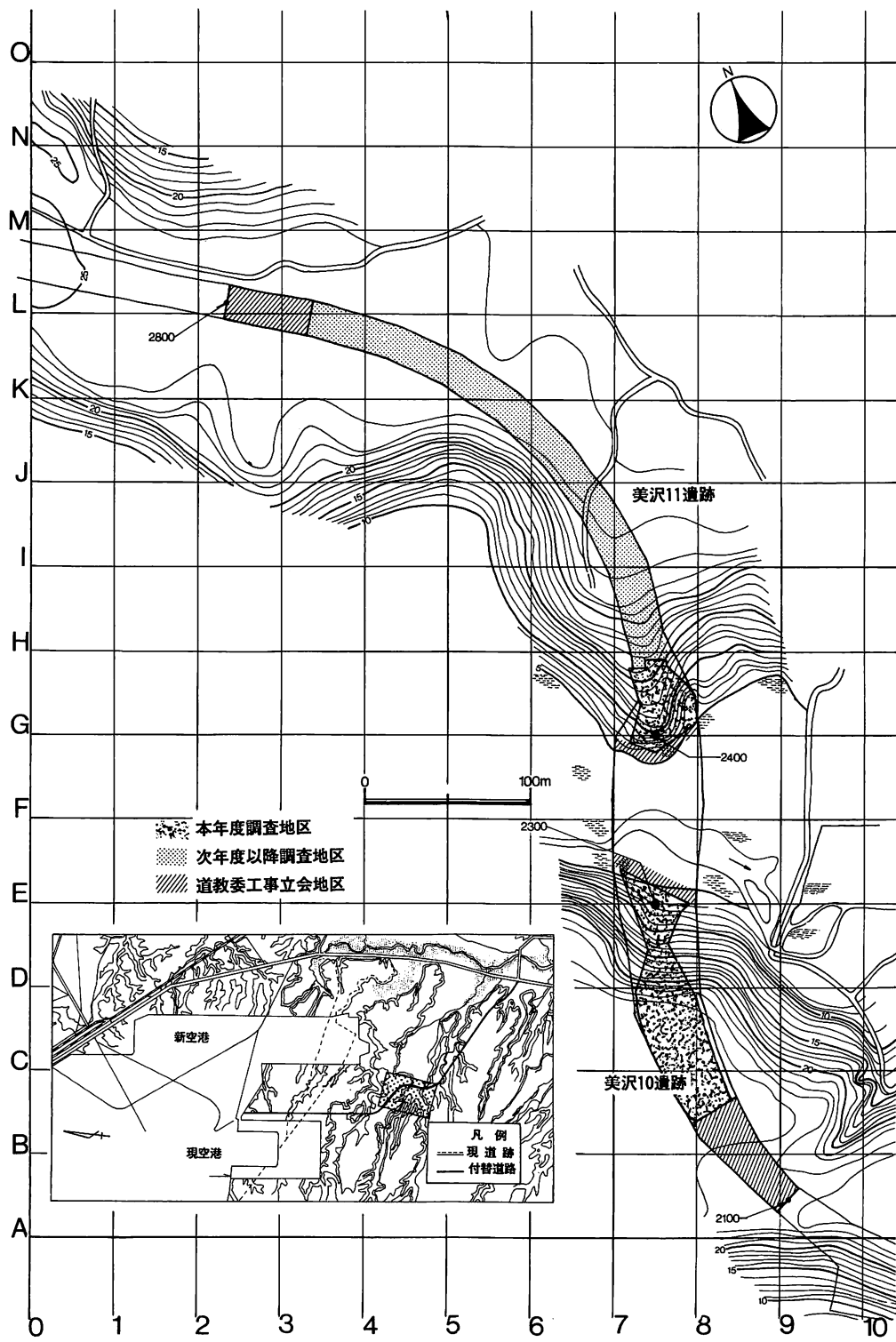


図7 ベンケナイ川遺跡群の分布

4) 美沢11遺跡—第4分冊—

美沢11遺跡は美沢10遺跡の対岸にあり、台地上から斜面にかけて立地している。本年度の調査区は斜面中腹から川沿いの低地部分にかけての1,570㎡である。調査は当初、Ⅱ黒層のみが対象であったが、Ⅱ黒層上面の精査時にⅠ黒層の土壌が確認されたため、Ⅱ黒層に先立ってこれらを調査した。

Ⅰ黒層からは、16個の土壌とその覆土から64点の土器、石器等が検出された。土壌は調査区全域からみつまっている。1個は後北C₂式期の墓と考えられるもので、他は縄文晩期末葉に位置付けられる可能性が高いが、用途は不詳である。

Ⅱ黒層からは、住居跡6軒、土壌10個、柱穴様ピット9個、焼土3ヶ所と共に3,033点の土器、石器等が検出された。また、調査区北東隅の一部には、Ⅱ黒層が断層となっている部分が発見された。

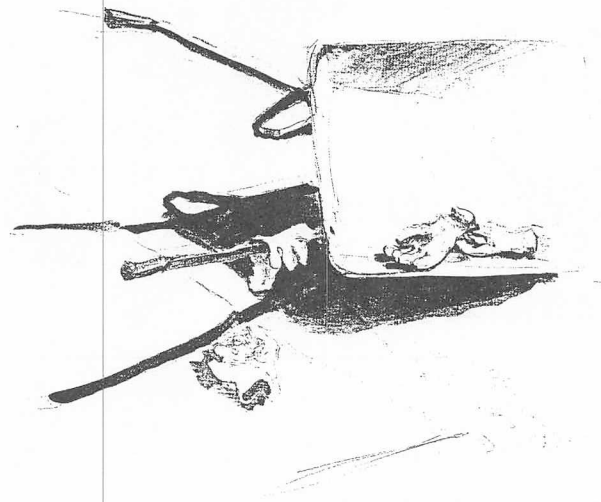
住居跡は縄文前期のもの4軒(H-1~4)、時期不詳2軒(H-5・6)である。これらのうち、前期のものは斜面中腹に分布しており、他は調査区北東隅の一段低いテラス部分にある。

土壌は、縄文晩期末葉に属する1個(P-101)以外は、時期、用途ともに不明である。

焼土はH-1上部のⅡ黒層上面(F-1)とH-5の覆土中から検出されており(F-2・3)、F-1の周辺からは縄文晩期末葉の土器片や有茎の石鏃が出土している。

検出された遺物のうち、土器には縄文早期~晩期末葉にかけてのものがあるが、V群c類が最も多く、Ⅱ群a-2類、Ⅲ群b類の順でこれに次ぐ。

石器等では、縄文前期に伴う無茎石鏃や美沢10遺跡にはほとんどない4か所に抉入がある石錘などがめだっている。



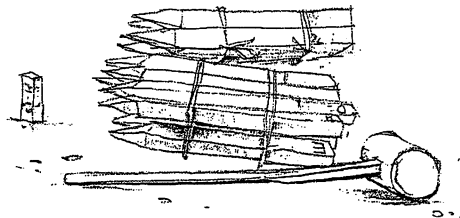
Ⅱ 遺跡群の立地と環境

新千歳空港の建設用地は、札幌と苫小牧のほぼ中間にあたる千歳市の南方にあり、現空港と国道36号線とに挟まれたところに位置している（図1）。用地は、北と西を現空港に接し、これと平行する南北に細長い範囲で、広さは、現空港との共有部分も含めておよそ710haである。用地の中央には、千歳・苫小牧両市の境界にもなっている美沢川が西から東に流れ、南端は、勇払原野からつづく湿原に面している。

この地域は、西方約30kmのところにある支笏カルデラを噴出源とする火山砕屑岩台地の東縁にあたり、地表は、更新世の恵庭岳、完新世の樽前山等の噴出物によって厚く覆われている。台地は、札幌～苫小牧低地帯に面し、これに向って東に緩やかに傾斜しており、西から東に流路をとる、ほぼ平行な幾筋もの谷によって刻まれている。美沢川、フレッペ湿原、ペンケナイ川も、このような谷のひとつで、低地帯南部を貫流する美々川の支流となっている。美々川は、千歳市市街地の南、現空港の東方に源を発し、美沢川など幾つかの支流と合流の後、全国でも有数の野鳥の棲息地として知られるウトナイト沼に注ぎ、勇払川、安平川と合して苫小牧市東郊で太平洋に達している。

この地域には、現在も大規模な湿原が発達しており、縄文海進時のころには、海水が入りこみ入江か潟湖のような景観であったと考えられている。縄文時代前期の内陸性貝塚として名高い美々貝塚は、美々川と美沢川との合流点から、本流を3kmほどさかのぼったところにある。ヤマトシジミを主体とし、縄文尖底土器を出土するこの貝塚は、このような環境のもとで形成されたものである（「美々貝塚」昭和50年度 千歳市教委）。

また、札幌～苫小牧低地帯南部は、冷温帯系の広葉樹と、亜寒帯系の針葉樹の混交する、汎針広混交林帯に属している。しかしながら、たび重なる火山噴出の降下物のためか、植生復活の早い広葉樹が卓越し、ことに美沢川周辺では、開拓以後に植栽されたものを除けば針葉樹はみられない。



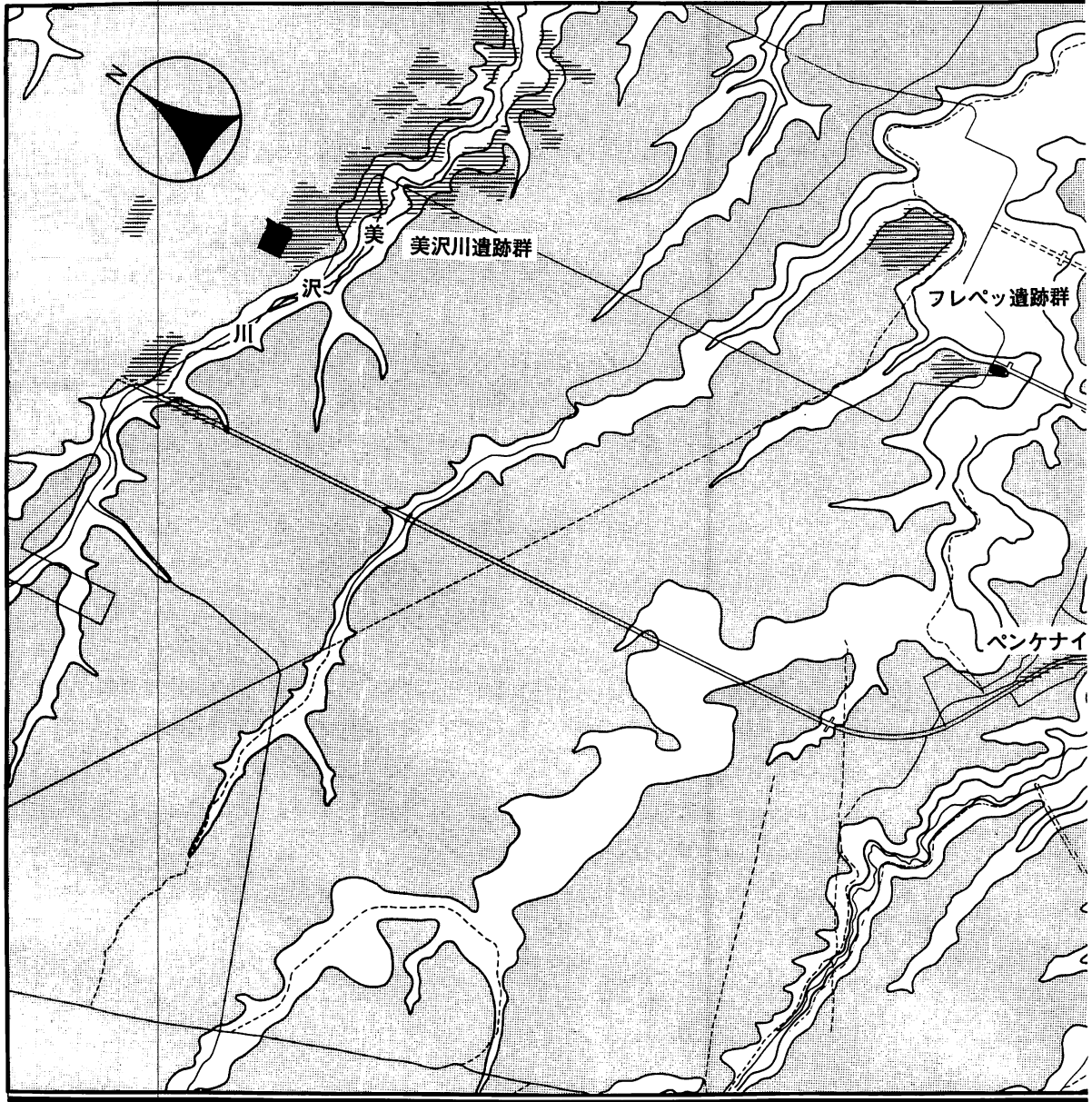
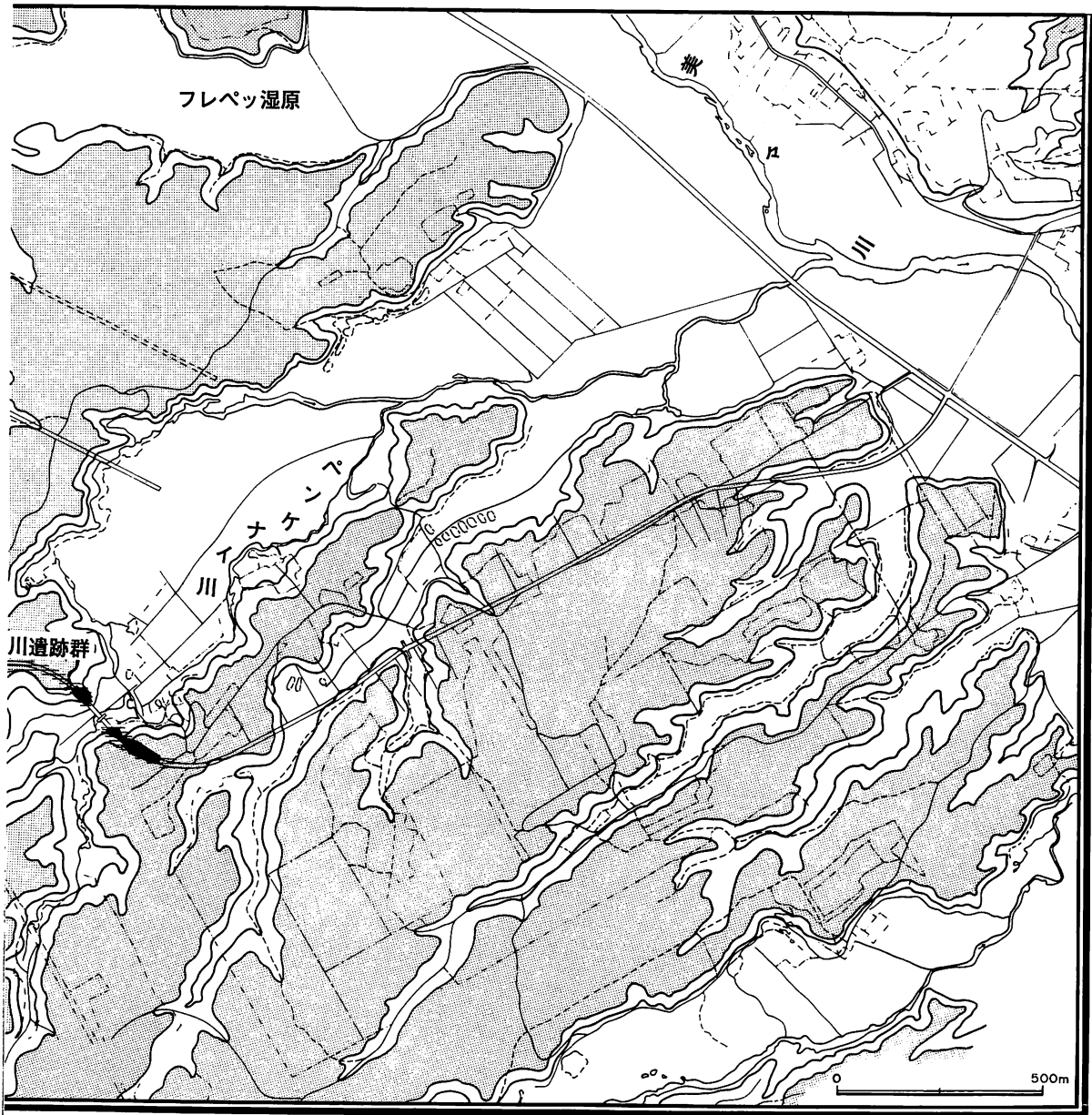


図8 遺跡群の立地と周辺の地形



- 標高20m以上の丘陵地
- 遺跡群範囲
- 本年度調査地区

Ⅲ 調査の方法

1. 発掘と整理の方法

各遺跡とも調査対象のⅠ黒層あるいはⅡ黒層を覆っている火山灰 Ta-a、Ta-b、Ta-c 層については、ブルドーザーによって下部10cm程度を残しながら除去した後に、残りを人力で除去している。

遺物包含層の上面を露出した段階で、表面のレリーフから道跡や動物の足跡を確認するとともに、各種の遺構の存在を予想することが可能である。美沢10・11遺跡の住居跡などは、この段階でその存在が予想できた。

包含層の発掘は、はじめ5m四方の区画を1区画おきまたは列ごとに掘り進め、早期に遺跡の概要を把握するよう努めた。その後は、通例のような遺構ごとあるいは区画ごとに発掘を進行させた。

美沢10遺跡ではⅡ黒層発掘終了後、Ⅲ黒層やローム質粘土層の確認調査を行った。Ⅲ黒層は、面積で全体の10%、ローム質粘土層は同じく4%について行った結果、Ⅲ黒層からは全く検出されなかったが、ローム質粘土層から石核および剥片、礫片が出土した。

また、住居跡から検出された炭化材は、全点番号を付して20分の1の平面および垂直分布図を作り、樹種同定用と¹⁴C年代測定の試料を採取した。樹種同定試料のサンプリング方法は長い炭化材については両端および中央部から2～3点、短いものは中央部から1点を親指大程度の大きさに採取した。

遺物の整理は、発掘現場において水洗・注記及び大まかな分類までの作業を行った。分類は後述する分類項目に従っている。

冬期間は、おもに遺物の復原、実測図の作成などの作業にあたった。土器は、完形品および3分の1程度以上に復原できたものについて実測した。破片については、時期・器形・文様等の出現頻度を考慮しながら抽出し、遺構からの出土品は、おもに伴出遺物を抽出して拓影図を作成した。石器は、器種、石材等の出現頻度を考慮しながら、おもに完形品について実測した。

2. 遺物の分類

分類にあたっては、土器は従来の分類基準をそのまま踏襲しており、石器等の分類では、昭和59年度に作られた基準（「美沢川流域の遺跡群」Ⅷ 昭和59年度 道埋文）を使用している。各遺跡・遺構の出土遺物一覧では、出土していない分類の項目は削除している。

(1) 土器

I群 縄文時代早期の土器

- a類 いわゆる貝殻文土器および条塙文土器群
- b類 絡条体圧痕文、組紐圧痕文、撚糸文、縄文等のある土器群
 - b-1類 東釧路Ⅲ式に相当するもの
 - b-2類 コッタロ式に相当するもの
 - b-3類 中茶路式に相当するもの
 - b-4類 東釧路Ⅵ式に相当するもの

II群 縄文時代前期の土器

- a類 いわゆる縄文尖底土器
 - a-1類 いわゆる網文土器およびこれに伴うとみなされる羽状縄文土器
 - a-2類 中野式土器およびこれに類するもの
- b類 円筒土器下層式土器、植苗式およびこれに類するもの

III群 縄文時代中期の土器

- a類 円筒土器上層式土器
- b類 円筒土器に後続する土器群
 - b-1類 天神山式に相当するもの
 - b-2類 柏木川式・紅葉山式に相当するもの
 - b-3類 トコロ6類および煉瓦台式に相当するもの

VI群 縄文時代後期の土器

- a類 余市式および入江式に相当するもの
- b類 船泊上層式、手稲式、ホッケマ式に相当するもの
- c類 堂林式に相当するもの

V群 縄文時代晩期の土器

- a類 大洞B式およびBC式に相当するもの
従来IV群c類に含めていたJX-3・P-106（道教委「美沢川流域の遺跡群」Ⅲ昭和53年度）で代表される土器群は、突瘤文・爪形文の組合せをもつ深鉢や三叉文等の付された壺・浅鉢等と破片で判別することは困難であるため、ここでは便宜上一括して本類に含める。
- b類 大洞C₁式およびC₂式に相当するもの
- c類 大洞A式に相当するものおよびタンネトウL式土器に類するもの

VI群 続縄文文化期の土器群

VII群 擦文文化期の土器群

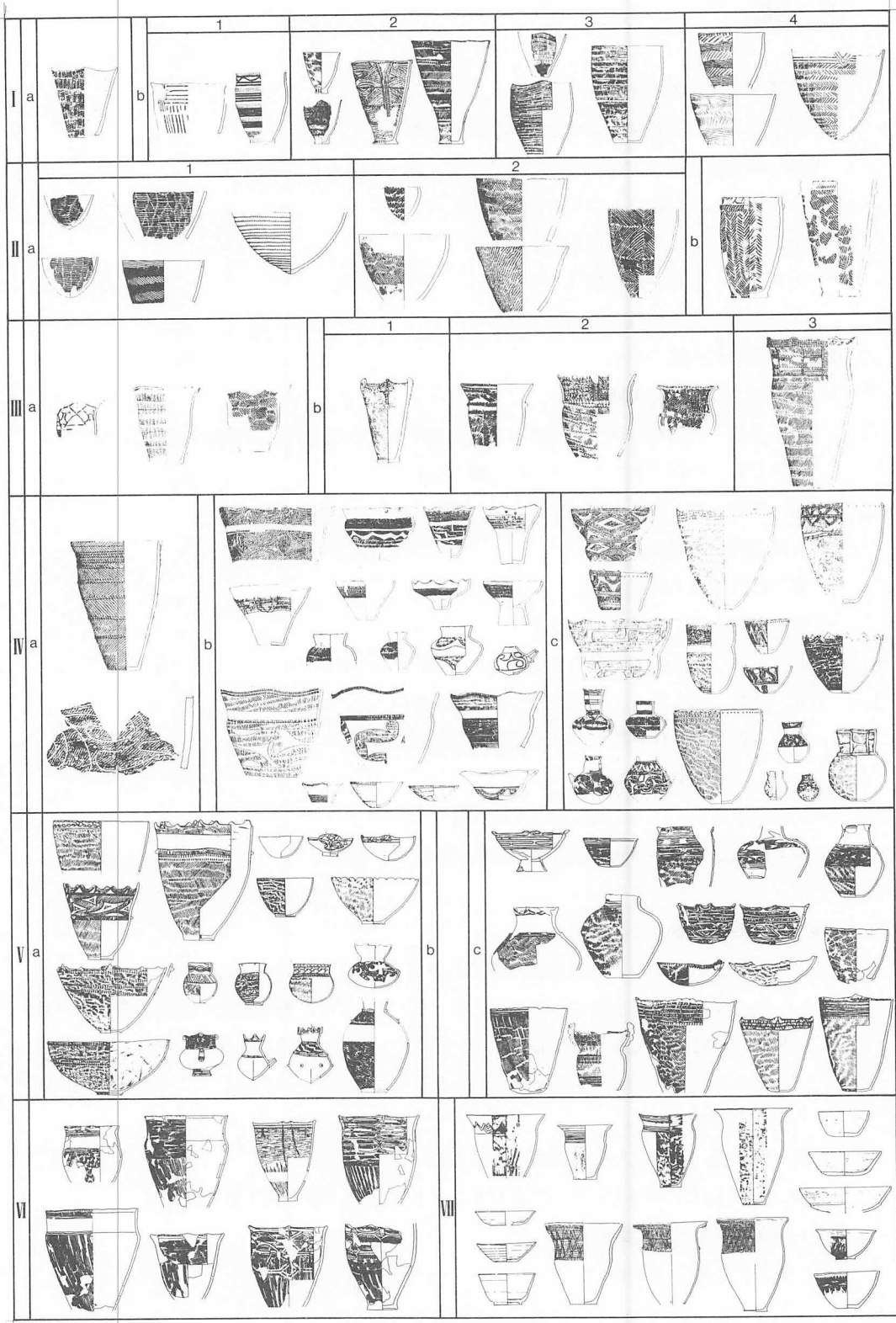


図9 土器の分類

(2) 石器等

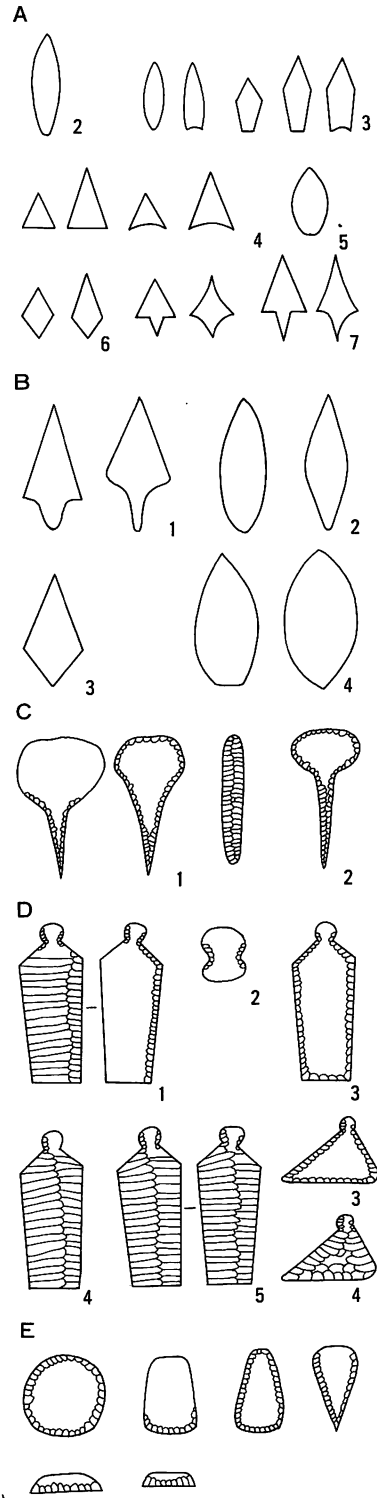
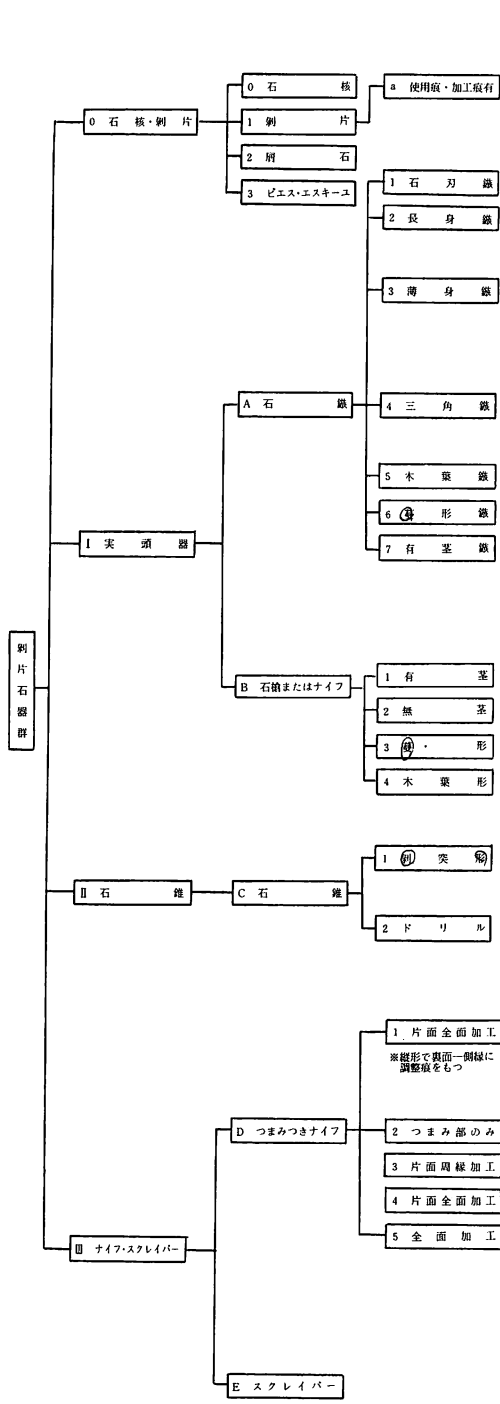


図10 石器等の分類(1)

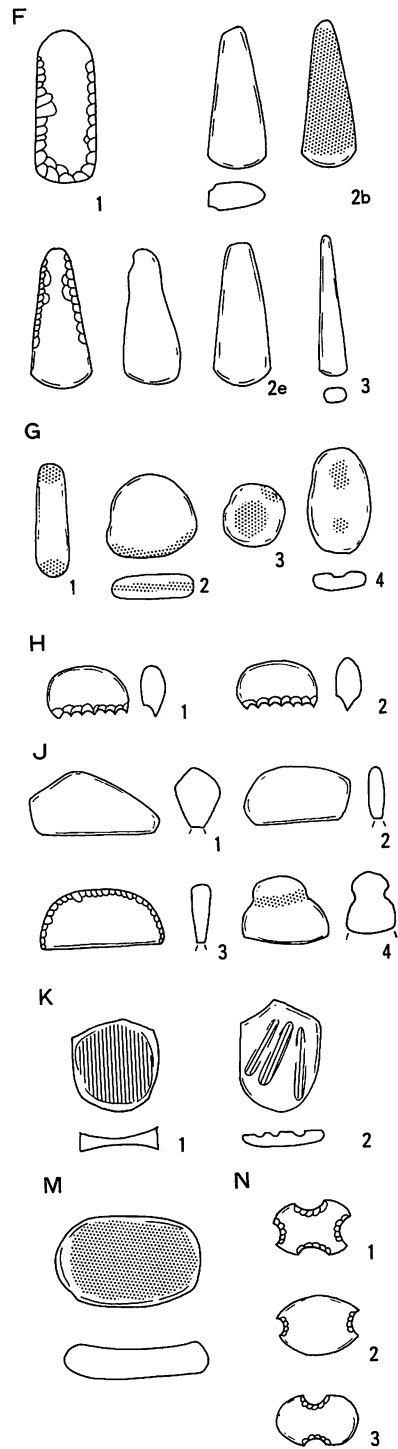
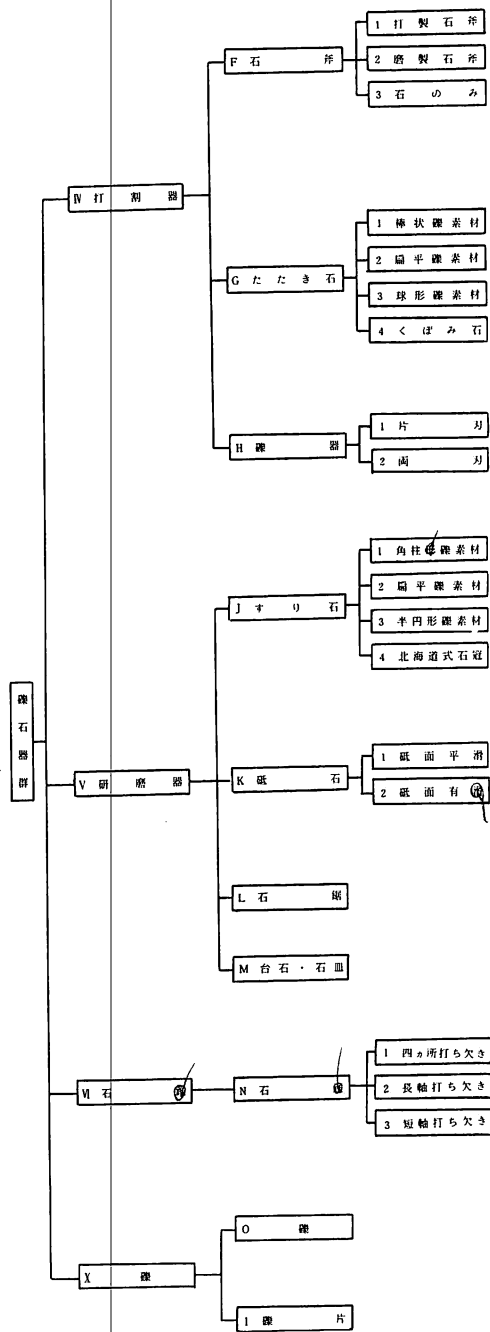
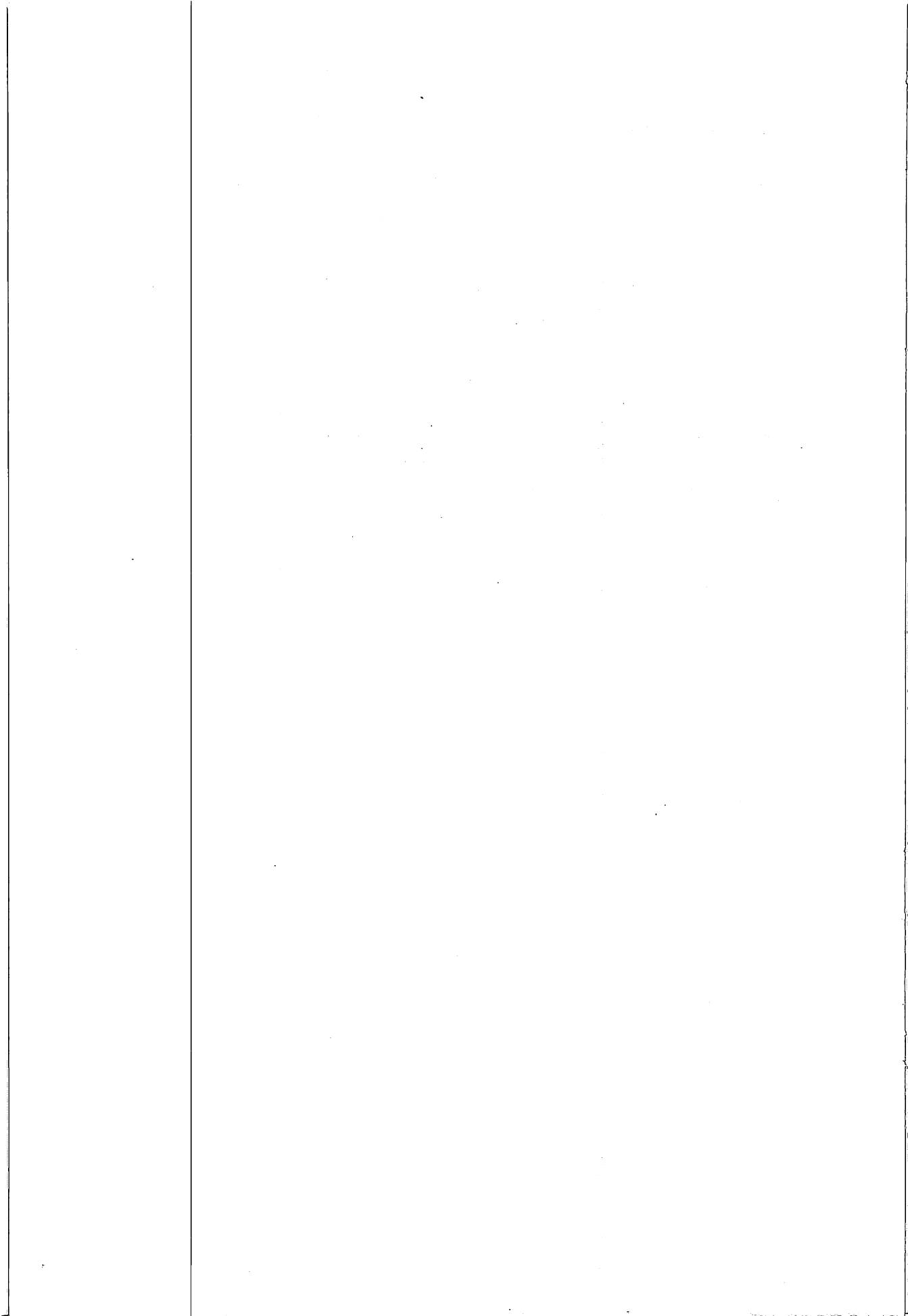


図11 石器等の分類(2)

引用文献（出典順）

- 千歳市教育委員会 1975 「美沢川流域の遺跡群」
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1982・84 「美沢川流域の遺跡群Ⅵ・Ⅶ」
〃 1979 「フレペツ遺跡群」
- 山田 忍 1958 火山噴出物の堆積状態から見た沖積世における北海道火山の火山活動に関する研究「地団研専報」 第八号
- 森田知忠ほか 1973 樽前降下火山灰 Ta - b 層下から出土した古銭の年代について 「北海道開拓記念館調査報告」 第4号
- 森田知忠 1978 樽前山火山灰と文化遺物 「どるめん」 第19号
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1985 「美沢川流域の遺跡群Ⅸ」
- 佐藤博之 1971 樽前火山灰 d 層の年代 「地球科学」 第25巻
- 北海道教育委員会 1978 「有珠川2・植苗3遺跡」
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1980 「美沢川流域の遺跡群Ⅳ」
- 北海道教育委員会 1978 「美沢川流域の遺跡群Ⅲ」
- 千歳市教育委員会 1975 「美々貝塚」



(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告 第35集
新千歳空港用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
第1分冊 調査の概要

発行日 昭和62年3月26日

発行者 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

〒 064 札幌市中央区南26条西11丁目

Tel (011)561-3131

印刷者 富士プリント株式会社

〒 064 札幌市中央区南16条西9丁目

Tel (011)531-4711

